

集會記

鶴屋城の復原図を見ながら

日時十一月七日(土曜)午後二時開演  
場所 佐伯市下鉄砲町洋画家保田先生アトリエ

保田先生が鶴屋城(山頂、天守閣及び四つの丸、山麓三つ丸)の復原図に對し、日頃の調査と油絵で描こうとしたものの春ハコとして、史談会に對し協力方、御依頼があった。そこで小野会員も数名の会員が、資料(絵圖や記録)の提供や参考意見を申し上げた。先生は、その御制作は、かなり進んだものであるが、更に資料に照らし、完璧を期したいとのことで、高木会長、宇田、高野、高野、高野、全部で十名が奮り出て、一応訪問史談会の形式となり、先生のお話を伺いながら、鶴屋城の復原図を前に、我々も遠慮を、勝手な見解を申し上げた。

町承知の通り、鶴屋城は佐伯藩初代毛利高政が築造、慶長十一年竣工。本丸、天守台には三層の天守閣が聳え、本丸、二ノ丸、北出丸、西出丸と山頂に威容を示していた。ところが、僅か十年程後、元和三年火災によつて焼失。山頂の不便をまけて取って山麓に三ノ丸を築き、寛永十四年に竣工している。それ故に以後明治に至る約二百三十年間、佐伯藩政は二百六十九年間、佐伯藩の十の政治は、ここで行われ、明治年間、佐伯小學校の敷育の場となり、その最後の建物が先般取り壊された。今「住吉御殿」となつて船頭町川のほとりに移築されている。(然しまた櫓門が三ノ丸には残っている)

保田先生の絵は六十号ほどの大作で、山頂の鶴屋城の姿は慶長、元和のころのもの、三ノ丸の御殿は江戸時代末期の様子を、いづれも旧記や古圖の資料に厳密により、極めて忠実に描かれ、尚かつ後世を誤らすことのないよう、念に描かれている。山頂と山麓、年代のへだたれがあるも、敢て一つの絵にまとめる、左のものなすけける。(中間に霞をなまかしてゐる) 先生は

院藏を期して居られるし、私達も御相談に答へて参り、見直し、進め、御夫人から御厚遇と受けながら、随分失礼でもあつた。お許しを願いたい。

三ノ丸は十数棟の殿舎がひしめき、如くに建ち並ぶ、それらに、庭園中庭に木石の配置よろしく、更に橋門前の路上に、御殿の廊下等に人物を配し、まことに親しめる園である。勿論まだ未完成といふこと、今日の会合である。木完成とは思えぬほど、かなり書きつくされてゐる。思われるが、私共が勝手気ままに申し上げたことも、お酌込み上完成されたこと、お期待される。完成のおかづきに、きつと軸を言う。記して、いつまでも後世に残る。郷土の名画を看まておろす。

保田先生は、私共の無難けな申し入れに、念じて、お若い頃の作品など、次々に見せて下さる。先生のアトリエが、私共にとつては何処よりも、教室であつた。これらの御指導と御教待に、私共はいささか甘えすぎたやうである。以上概要を記して、鶴屋城の園の完成を期待申し、謝意を表する次第である。(井原幹事記)

國東、宇佐方面見学旅行

コースの一部変更について——御諒承を乞う——  
水大堂への景道のトレンネル改修工事は、はじまり、バスは運行不能となつた。

豊後高田から、途に高貴寺、真木大堂として、時間がかかりかかる。そして、徳野廣嶺、仏見堂にして、徒歩往復四軒余、立石から往復三軒間、近くを要する。そこで、この三ヶ所は、次の機会(来季にも)に、必ずしも、そのかわりに、宇佐方面を伸ばし、帰りに、持茶を加えることとした。持茶城の見学をしようと思つた。尚外に見学箇所あるらば、当日途中で検討、コース修正の余地あり。(以上)